令和５年度

明るい家庭づくり

児童生徒作文集



倉敷市教育委員会

もくじ

優秀作文

◆小学生の部◆

ぼくはおにいちゃん　菅生小学校　一年　大村　由詩　1
弟と私　菅生小学校　二年　吉國　志穂　2
笑顔でキラキラの家族を目指して　連島南小学校　三年　山岡　未來　3
いつもとちがう夏休み　柏島小学校　四年　林　陽菜　4
バタフライと妹　長尾小学校　五年　福井　颯太　5
ありがとう　上成小学校　六年　河端　煌士朗　6

◆中学生の部◆

わが家の在り方　南中学校　一年　大久保　明日花　7
私の大好きなおばあちゃん　真備東中学校　二年　宮本　菜月　9
私と弟　連島南中学校　三年　小山　未来　11

優良作文

◆小学生の部◆

わたしのおじいちゃん　第四福田小学校　一年　井原　奈菜　13
だいすきなおにいちゃん　赤崎小学校　一年　浅野　かなみ　14
かぞくのためのまほう　倉敷東小学校　二年　朱　輪花　15
たからもののキズ　第一福田小学校　二年　白神　実華　16
じいじの木　長尾小学校　三年　小野　凌太朗　17
お兄ちゃんがいてくれるから　船穂小学校　三年　林　千紗子　18
ばあちゃん　粒江小学校　四年　松本　日向　19
わたしのおじいちゃんおばあちゃん　川辺小学校　四年　吉田　愛梨　20
次はオレがみんなのために　帯江小学校　五年　小山　一陽　21
忘れたくない思い出　琴浦西小学校　五年　黒川　多恵　22
姉の入院で感じた家族の大切さ　老松小学校　六年　大野　源太　23
ぼくは元気　玉島小学校　六年　濵　湊都　24

◆中学生の部◆

笑顔になる料理　船穂中学校　一年　井上　結衣　25
雑炊のような家族　倉敷天城中学校　一年　田井　遥　27
後悔　東陽中学校　二年　堤　有煌　29
ぼくの家族　倉敷天城中学校　二年　仁科　貴悠　31
愛を言葉に込めて　東中学校　三年　伊藤　万央　33
祖父と私の夏休み　味野中学校　三年　齋藤　真結子　35

優秀作文

◆小学生の部◆

ぼくはおにいちゃん

菅生小学校　一年
大村（おおむら）　由詩（ゆうた）

ぼくは四にんきょうだいの一ばんめです。おとうとは三さい、一さい、一さいです。

おにいちゃんは、まいにちいそがしいです。しょうがっこうにいったり、しゅくだいをしたり、ごはんをたべたり、おふろにはいったりします。

おにいちゃんは、たいへんです。つかれます。しゅくだいをしているときでも、うるさかったり、じゃまされます。ごはんをたべているときは、ふざけるからおこります。ごはんをたべさせてあげます。おふろでは、あそんであげます。おかしはわけっこするから、すぐなくなります。ぼくがすくなくてもがまんするときがあります。

おにいちゃんはさみしいです。おとうさんとおかあさんは、おとうとたちのことばかりします。ぼくには、

「おにいちゃんだからできるでしょ。」

といいます。ぼくのこともしてほしいです。

でも、ぼくはおにいちゃんでよかったです。おとうとたちはかわいいからです。だいすきです。おせわするのはたいへんだけど、おとうとたちがわらっているから、うれしくてがんばれます。おにいちゃんはりっぱなおしごとだとおもいます。ぼくはこれからもずっと、おにいちゃんをがんばります。がんばるから、ほめてくれないかな。ごほうびくれないかな。



弟と私

菅生小学校　二年
吉國（よしくに）　志穂（しほ）

私には大好きな三さいの弟がいる。でも、弟は二つ上のお姉ちゃんのほうが好きだ。だって、いつも私よりお姉ちゃんのほうに行くばかりする。くやしくて弟のほっぺをつまんだ。すると、弟がおこって、けんかになる。

夏休み、お母さんに弟のお世話たん当をまかされた。できるかしんぱいだったけど、なかよくできるチャンスだと思った。

弟はお風ろがきらいだ。私のお手つだいは弟の体あらいをすることだ。弟はお風ろに入ると、シャワーであそびはじめた。口の中に水を入れて、ふきだした。私は、

「だめだよ。」

と言ったけど、だんだんたのしくなって、自分もあそんでしまった。

つぎの日も弟はシャワーであそびはじめた。弟がシャワーをかしてくれなかったから、つよい言ばで、

「早くかして。」

と言って、むりやりシャワーをうばいとると、弟はおこってないた。それを見たお母さんは、やさしい言ばで、

「頭はながせたんだね。つぎはシャンプーをしようか。」

と弟に言った。すると、弟はなくのをやめて、シャンプーをしはじめた。

次の日のお風ろで、私はやさしい言ばで、

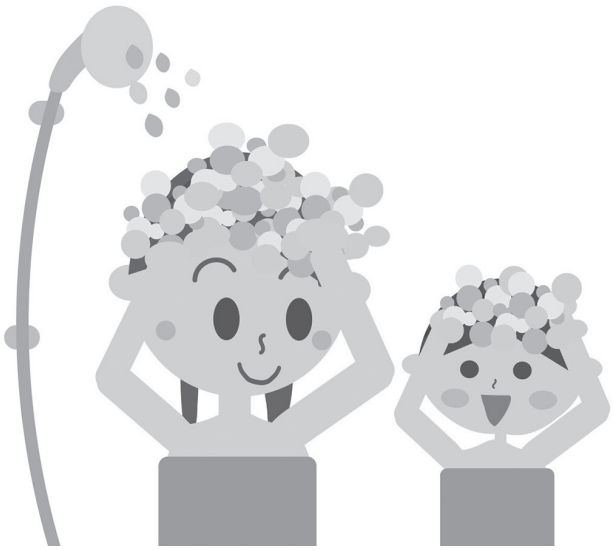
「まずは体をながしてシャンプーをしようか。」

と言ってみた。すると、弟は自分でシャンプーをしはじめた。私はかわいいなと思った。弟のお世話ができる自しんになった。やさしい言ばをつづけていくと、一しょになかよくあそべる時間がふえた。

やさしく言うと、自分が思っていることがあい手につたわるようになった。お母さんは、

「自分が言われていやなことは人に言わない。自分がされていやなことは人にしない。」

と言う。家でも学校でも気をつけていきたい。



笑顔でキラキラの家族を目指して

連島南小学校　三年
山岡（やまおか）　未來（みく）

家事をするお母さんを見ていて感じることがあります。

それは、料理や洗い物、そうじ、洗たく、片付けなど、とてもたくさんのことを毎日していて本当にすごいなということです。

夏休みになって家にいる時間が増えて、私が学校に行っている時に毎日何をしているのかを知ることができました。お母さんは、私たち家族のために一生けん命家事をしてくれて、家を整え、気持ちよく暮らせるようにしてくれていたのです。

朝起きると布団を整えて朝ごはんを作ります。朝ごはんの片付けをして、洗たくをして干します。洗たくきが動いている間に家中をそうじして回ります。洗たく物を干した後、庭の手入れをしたり、野菜を収穫したりします。草取りをする日もあります。

そうしていると、あっという間にお昼ごはんの時間です。お昼ごはんを作って、洗い物や片付けをしたら少し休める時間ができます。その後はすぐに夕ごはんの準備です。夕方になったらお風呂を入れて洗たく物をしまってたたみます。夕ご飯の洗い物をしたり寝る準備をしたりしているとあっという間に一日が過ぎていきます。空いてる時間にも私たちの勉強や遊びの相手をしてくれたり、塾の仕事をしたりしていてとても忙しそうです。

そんなお母さんを見ていて、私は、「お母さんは自分の好きなことをする時間がとても少なくなっていてかわいそうだな。」と感じました。そして、お母さんの役に立てることをしたいと思うようになりました。

私は、お母さんにお願いして洗たくを干すことを役目にしてもらいました。

ある日、お母さんが外で花に水やりをしている時に、だまって洗たく物を干したことがありました。そうしたら、外から帰ってきたお母さんがそれに気づいて、

「みく、ありがとう。とっても助かるよ。」

と言ってくれました。その時、私は、一つでもお手伝いをすることでお母さんがこんなにも喜んでくれていることを知って、とってもうれしかったです。私が、洗たく物を干す以外にも、洗い物や床みがきなどをお母さんの代わりにやれば、お母さんが楽になるし、家族も皆楽しく過ごすことができると思いました。

この経験を通して、私は明るい家庭を作るために大切なことは、何でも人任せにするのではなく、家族の一人ひとりが、他の家族のために進んで仕事をしたり、優しい言葉をかけたりすることだと思いました。私は、これからも洗たく干しだけでなく、自分の使ったものを片付けたり、汚れに気がついたらふいたりして、できることからやろうと決めました。大切な私の家族が毎日もっと笑顔で楽しく、自分の大好きなことをたくさんして過ごせたら、私にとって最高の幸せです。



いつもとちがう夏休み

柏島小学校　四年
林（はやし）　陽菜（ひな）

「入院でーす。」

大きい病院で待っていた父と私に母が言った。夏休み前から熱の下がらない妹が入院することになったのだ。母はやっと安心できるといった感じだったが、私はちがっていた。だって、楽しみにしていた遠い方のそ父母の家へのおとまりが出来なくなって、私は一人、近所のそ父母の家で過ごす事になるからだ。せっかく楽しみにしていたのに、妹のせいだ…と、くやしくてなみだがうかんだ。母とはなれるのもさみしかった。そんないつもと全ぜんちがう夏休みが始まった。

そ母は私がさみしくない様にと、よくしてくれた。おいしいイチジクジャムのパンを出してくれたり、服を買いに連れて行ってもくれた。庭のブルーベリーをつませてくれたり、一しょにテレビを見たり、ねたりしてくれた。おかげで私も楽しくすごす事ができた。でも、夜暗い部屋でねる時間になると、どうしてだかさみしくなった。家で妹とさわぎながらねる様子が頭に浮かんだ。

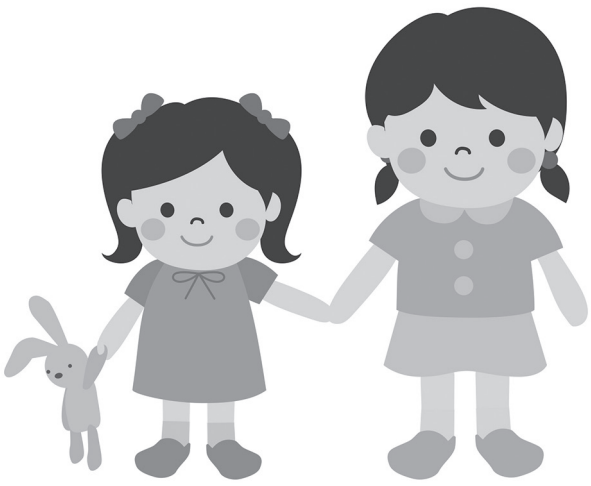
そんな中での私のひそかな楽しみは、病院のごはんの時間に、

「ごはんのメニューはなんですか～？」

と電話をして、妹と母の声を聞くことだった。くだらない変な会話ばかりだったけど、妹の声が日に日に元気になっていくのがとてもうれしかった。ごきげんななめだった時も、私の電話のおかげでごきげんになってくれていたらしい。「助かってたよ。」と、後になって母に聞き、ほめてもらえて照れくさい気持ちになった。本当は私がさみしくて声が聞きたかっただけなのに…。でもよろこんでもらえていて、すごくうれしかった。

いつもうるさくて、けんかばかりの妹。でもはなれてみると、何の気もつかわず、気楽にすごせる最高の相ぼうだったんだと気が付いた。いつもの楽しい夏休みにならなくてざんねんだったけど、何の変てつもないふつうな毎日が、実はとても幸せだという事にも気がつけた。家族みんながただ元気だという事、それが私にとっては、どこか特別な場所に遊びに行くよりも実は心地良い幸せなのかもしれない。そう感じた出来事だった。もちろん遊びにも行きたかったけど…。大切な事に気が付けて、私もまた一つ成長出来たように思う。

妹が帰ってきた。まだヨロヨロだけど、お口はもうすっかり元気だ。母は未来から帰ってきた様に、夏休み前のままの学校の荷物やプリントの山にあわあわしている。父はいつもの様に、宿題宿題と言ってきてちょっとうるさい。聞こえないふりをして遊ぶ、妹と私。やっといつもの日じょうだ。夏休みもこれからリベンジだ！



バタフライと妹

長尾小学校　五年
福井（ふくい）　颯太（そうた）

ぼくは、泳ぐことが大好きで、今日までコツコツ水泳を続けている。そのスイミングでは二ヶ月に一回進級テストがあり、そのテストがぼくを苦しめていた。

順調に合格していたテスト。だが、今回のバタフライ五十メートルを、決められたタイムで泳ぐテストには大苦戦している。バタフライ自体がとにかく苦手。苦しいし、リズムもバラバラになるし、体がいたくなる。もう四回も落ちている。そのうちに後から習い始めた二歳下の妹がどんどんぼくの級に追い付いてきた。あせる気持ちとくやしい気持ちで逃げ出したくなった。

「もうスイミングやめよっかな。四泳全部泳げるようになったし。」

母に聞こえるように、そっとつぶやいた。追い付かれるのだけはどうしてもいやだったからだ。しかしそんなの母には全部お見通しだった。

「ここでやめるのは簡単だよ。一緒にひみつの特訓してみない？」

そこから妹に内緒でひみつの特訓が始まった。日本代表の人が泳ぐ動画を見たり、手の回し方を練習したり、バタフライのリズムを何度も確認したりした。今度こそ絶対大丈夫だと思って挑んだテストも後0.9秒でまた落ちてしまった。ついに妹がぼくの級に追いついた。もう今度こそ本気でやめたくなった。そんな時お母さんがだまってぎゅーと強くだきしめてくれた。何だかすっと心も落ち着いてきた。

最初は妹と一緒かとモヤモヤした気持ちが大きかったけど、

「お兄ちゃん、バタフライしんどいよね。どうやったら腕が上に上がるん？」

と聞いてくれた。二人で一緒に泳ぐのが楽しいと感じるぼくがいた。

五度目のテストの日。ぼくは今まで以上にきんちょうしていた。

「お兄ちゃん、がんばろうね。」

この言葉を聞くと、どうしても今回合格したかった。お母さんは祈るように見ていた。

結果は、まず妹が名前をよばれた。合格だった。でも喜んでいない。時間がたってぼくの名前がよばれた。合格だ。

「お兄ちゃん。おめでとう。」

と妹がすごい笑顔でぼくにとびついてきた。みんなの前ではずかしかったが、妹のやさしさにふれて心が熱くなった。

「二人とも、よかったね。本当におめでとう。」

と母が強くだきしめてくれた。なんか声がふるえていると思って顔を見上げたら母はすごく号泣していた。そんな母を見て妹も泣き出した。妹もぼくの苦しい気持ちに気付いていたのだろう。気が付けば三人でくっついていた。ささいなことでも喜んで泣いてくれるやさしい家族と、これからもいろいろなことに挑戦しながら、どんな困難なことに出合っても乗りこえていきたいと強く思った。



ありがとう

上成小学校　六年
河端（かわばた）　煌士朗（おうしろう）

六月のある日、おじいちゃんが病気になり、入院して手術をする事になったとお父さんから聞かされた。僕はとても心配になった。お父さんとおじいちゃんは同じ会社で働いているため、おじいちゃんが入院している間お父さんは休みがとれなくなるということも、聞かされた。お父さんは普段も休みが少なく、土日も休みではないので、お父さんが休みの日に、学校から帰って一緒に遊んだり、ふれ合ったりする時間は、僕にとってとても貴重だった。だから、今以上にお父さんとの時間が減ってしまうと思い、悲しい気持ちになった。でも、お父さんはいつも自分の事よりも、周りや家族の事を一番に考えてくれる人なので、おじいちゃんの事や会社も大変なのに、僕たちにさびしい思いをさせないように、気遣ってくれている事が伝わってきた。仕事で疲れているのに、僕との時間を少しでもつくろうと、寝ている僕の布団に入ってきてくれて、眠るまで僕のそばに居てくれたり、その日一日学校であった事をたくさん聞いてくれたりした。一番疲れているはずなのに、家族みんなが、

「大丈夫？体休めてね。」

と言っても、いつも変わらず、明るく元気で

「大丈夫だよ。」

と返してくれた。そんなお父さんを見て、僕は何も力になれないけれど、お父さんに気を遣わせないように、

「次の休みはいつ？」

など聞きたいのを我慢するようにした。

おじいちゃんの手術は成功し、無事に退院する事ができた。その日、お父さんは家族みんなを集めて、

「おじいちゃんは元気になったよ。休みがとれなくてさびしい思いをさせてごめんね。優しい言葉をかけてくれたり、協力したりしてくれてありがとう。本当は、いつ休み？とか言いたかったのに我慢して気遣ってくれてありがとう。そのおかげで、おじいちゃんも頑張れたと思うし、お父さんもすごく力になったよ。」

と言ってくれた。僕はおじいちゃんが元気になって安心して嬉しかったのと同時に、お父さんが僕たち家族にありがとうの気持ちを伝えてくれて、とてもあたたかい気持ちになった。

口でわざわざ言わなくても伝わるけれど、それをきちんと口に出して伝える事の大切さを改めて感じた。僕の家族は、普段から「ありがとう」や「ごめんなさい」の言葉を素直に言うように心がけている。それはこんなお父さんの背中を見て育ったからだと思った。僕が我慢をしていた事にも気付いていたお父さんの言葉を聞いて、どんな時もお互いの気持ちに寄りそって、気付いて、助け合える家族で良かったと思った。それは、家族の中だけではなく、社会に出ても大切な事だと思う。僕たち家族に、大切な事を伝え続けてくれているお父さんを尊敬しているし、世界一のお父さんだと思う。

「お父さんいつもありがとう。」



◆中学生の部◆

我が家の在り方

南中学校　一年
大久保（おおくぼ）　明日花（あすか）

「ねえねえ、おじいちゃん。そろばん合格したからフルート買って。」

これが家族の大げんかへの第一歩となるとは思いもしなかった。

私は中学に入り、吹奏楽でフルートを担当することになった。最初のうちは学校のを借りる予定だったが、友達も先輩も自分のきれいなフルートを持っているし、家でも毎日練習して上手になりたいという気持ちが高まり、私も欲しいと思うようになった。しかし、フルートは高価なもので買ってもらえないと思っていた。けれど、祖父に相談してみたら、

「そろばん検定で合格したらお祝いで買ってあげるよ。」

と言ってくれたので、そろばん合格を目指して必死で勉強した。そして、見事合格し、祖父にそのことを報告すると、祖母もすごく喜んでくれて私も嬉しかった。それから祖父がどのメーカーの楽器がいいのか、どのランクなら中学生向けなのか、親戚に聞いてくれたり、インターネットで調べてくれたりして、アドバイスしてくれた。私は楽器屋さんへ行き、いろいろ吹き比べをしてみると、祖父が勧めてくれた楽器は、私にとって音を出すのが難しく、店員さんに、玄人向けで修理に時間がかかると言われ、私は違うメーカーのフルートがいいと思った。でも、私が選んだものは予算オーバーで少しあきらめかけていた。そのことを父に相談すると金額に驚き、

「そんな高いフルートがもし盗難されたらどうするんだ。」

と言い出し、私と母は思わず

「盗難なんか聞いたことないわ。心配するところがおかしい。」

と言ってけんかになった。父が、

「子供にそんな高いものを持たせて心配せんのか。」

と言い、母は反撃した。

「それなら、フルートを持って行く時は常にケースに入れて自分で持っておいて、学校には置いて帰らないようにしたらいい。」

私もそれに納得していたけれど、父は、

「そんな高価な楽器は必要ない。それでもあきらめられなければ盗難保険に入れ。」

と言う。私はそこまでもめるならフルートはいらないと泣いてしまった。そんなとき、このけんかを止めたのはなんと、チャットＧＰＴ。私がチャットＧＰＴなら、このけんかを解決してくれると思い、「フルート盗難について心配している人の適切な応答」と入力すると、今の状況にぴったりな返答が出てきた。それを見せると父は笑い、母も笑顔になり、今まで冷たかった家の中が一気に温かくなった。とりあえず盗難保険に入るという約束でフルートを買いに、楽器屋さんへ行った。祖父には申し訳ないけれど、自分の欲しいメーカーがいいと伝えると

「自分が使うものだから自分で決めていいよ。」

と言ってくれたので、予算オーバーだったが自分の欲しかったフルートを買ってもらうことができた。

このフルートは、みんなの思いが詰まったものだ。買ってもらって満足するのではなく、

たくさん練習し、毎回きれいに磨き、置く場所にも気を遣いながら大切に使いたい。

私の家族は自分の思いを相手にぶつけてけんかになるけれど、最後にはそれぞれの思いを理解し、認め合うので仲が良いのかなと思う。相手のことを気遣って、これを言ったら傷つくかなと思って言わなかったり、我慢したりするのではなく、自分の正直な思いを相手に伝えて、もしそれが間違っていたら指摘し合えるのが家族だ。けんかも多いけれど、ぶつかり合いながら少しずつ前に進むのが、我が家流の在り方である。



私の大好きなおばあちゃん

真備東中学校　二年
宮本（みやもと）　菜月（なつき）

「ただいまー。」
私は玄関のドアをあける。
いつも両親は帰ってくるのが遅く、小学校低学年の頃はいつもおばあちゃんの家に帰っていた。私の家からおばあちゃんの家まではとても近いので、長期休みに入ると兄と一緒に毎日おばあちゃんの家に行っていた。おやつをたくさん食べて、あやとりや折り紙、おはじきなんかで遊んだり、ボールで遊んだり散歩をしたりする。歩いて買い物に行ったりいっしょに料理を作ったりもした。おばあちゃんの家の裏山でつくしを取ったり、ヨモギを取ったりして、たくさんのことを経験できてとても楽しかった。おばあちゃんに強くあたってしまったこともあるけれど、こんなふうにおばあちゃんと過ごすのがとても楽しくて嬉しくてしかたがなかった。
しかし、高学年になっていくにつれて、おばあちゃんの家に帰ることが恥ずかしくなっていた。よく家の前に立ってくれていたけれど、他の人に見られるのが恥ずかしいから家の前に立つのはやめてほしい、と言ったこともあった。友達やまわりの子が自分の家の鍵をもっていたこと、一人で留守番をしていることが羨ましかった。母から自分の家の鍵をもらってからは、だんだんとおばあちゃんの家に帰らなくなっていた。長期休みに入っても、お昼ご飯を食べて少し話をしたらすぐ帰るようになっていた。
中学生になってからはおばあちゃんの家に全く行かなくなっていた。長期休みに入っても、毎回おばあちゃんが私の家に、一生懸命作ってくれたお昼ご飯を歩いて届けに来てくれた。お昼ご飯以外にも、おやつに食べてねと言って、ヨーグルトや果物なんかも持って来てくれる。
「いつでもばあちゃんの家に食べに来てええけんな。でもわざわざ家に来るのも大変じゃもんなぁ。」
そういって笑いながらおばあちゃんは言ってくれる。私はいつも笑って誤魔化してしまうけれど、心の中では申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。
おばあちゃんは私のことや私の家族のことをよく心配してくれる。わざわざ私の家に野菜や果物を持って来てくれたり、お店で買った惣菜を持って来てくれたりする。私だけではなく昼すぎに仕事から帰ってくる母の分のお昼ご飯を作って持って来てくれることもある。他にも、私が友達と遊びに行くということを伝えたときはいつも
「これで楽しんでおいで。」
と言ってお小遣いをわたしてくれるのだ。
お昼ご飯を届けに来てくれたときは私の家でいっしょに話をする。最近あったことや最近暑いね、とか、そんな他愛もない話をする時間がとても楽しい。おばあちゃんは私と会ったとき、身長を比べたがる。全くといっていいほど私の身長は伸びていないのに
「なっちゃんまた背伸びたじゃろ。」
と言ってくれる。私の身長は小学六年生から変わっていない。たぶんおばあちゃんがどんどん縮んでいるだけ。このことを本人に伝えたらどんな反応をするのだろう。そんなことはない、と言うのかな。

そこには私の大好きなおばあちゃんが立っていた。

一度、おばあちゃんが

「いつも同じようなおかずばっかりでごめんな。」

と言ってきた。私はすぐ否定できずにいた。おばあちゃんが私のためにお昼ご飯を作ってくれて、私の家まで届けに来てくれて、そしてたくさん話をしてくれるだけで嬉しいんだよ。そんなことは恥ずかしくて言えなかった。けれどいつか面と向かって言いたいと思った。

「なっちゃんの結婚式までは元気に生きんといけんな。」

とおばあちゃんは言っていたけれど、私はおばあちゃんに自分の子どもを見せてあげたいな。それまで絶対元気で長生きしてほしい。

「ひいおばあちゃん」と呼ばれて笑顔になるおばあちゃんを私は見たい。

今日はおばあちゃんがお昼ご飯を届けてくれる日。今日はどんな話をしてくれるだろう。そして私はどんな話をしよう。とても楽しみだ。今度は久しぶりにおばあちゃんの家に行こうかな、おばあちゃん、喜んでくれるかな。

「ピンポーン」

チャイムがなった。私は玄関のドアを開ける。



私と弟

連島南中学校　三年
小山（こやま）　未来（みく）

私には弟が一人います。その弟には発達障がいがあり、色々な困難を乗り越えながら生活しています。

私の弟はＡＳＤ(自閉症スペクトラム)という障がいがあって、騒がしい場所が苦手だったり、話すときに一言目を連発してしまうなどの自閉症スペクトラム特有の行動をよくとっています。

昔の私は、弟の発達障がいのことを全く知らなかったので、気に入らないことがあるとすぐ泣いて話を聞いてもくれない弟のことを嫌がり、避けていました。ですが弟は私に何をされても何を言われても、一度も私のことを「嫌い」と言ったことはなく、小学五年生になった今でも笑顔で「お姉ちゃん、お姉ちゃん。」と慕ってくれています。そんな弟の心の広さに気づき、私は自分が情けなく思えてきました。

それに気づいてからは大事な弟の「お姉ちゃん」として弟に接するようになりました。弟と言い合いにならないように優しく話しかけたり、弟が泣いているときはイライラせずに

「どうしたの？」

と声をかけるなどしてみると私も弟もストレスが減って、これまで以上に仲良く話せるようになりました。そのおかげで家の雰囲気も明るくなり、家族の仲も深まったと思います。

今では、家族みんなでカードゲームやテレビゲームをしたり、一緒にご飯をつくったりすることもあります。

その中でも特に楽しかったのは、年末にすごろくのテレビゲームを皆でしたことです。年が明けるまでテレビを囲んで全員で今年一年あったことを話しながらゲームをしました。涙が出るほど笑ったり、手に汗にぎる展開で逆転したり、本当に楽しく、一年を締めくくる最高の時間となりました。

ですが、中学二年生のある時、私に事件が起きました。それは、部活内での「いじめ」です。私は、同じ部活の女子に無視や陰口などの嫌がらせを受けました。暴力を振るわれたわけでも、物を取られたわけでもありません。だけど、これまで生きてきた中でそういうことをされたことがなかった私は、とても戸惑いました。学校では、全員が敵に見え、家に帰っても変な想像が止まらず、夜は心臓が押しつぶされるような不安感に駆られて一睡もできませんでした。正直、その時は生きた心地がしませんでした。そんな時、私を救ってくれたのはやはり家族の存在でした。最初、お母さんが私の様子がおかしいことに気づき話を聞いてくれました。その後、お父さんや弟も交えて話をしました。私が泣きながら話すのを皆は、静かに聞いてくれました。話し終わると皆様々に声をかけてくれました。特に、弟が私に抱きついて

「お姉ちゃんはすごいね。いつも強い。」

と言ってくれたことが心に残っています。

私は、この出来事を通して家族の愛や絆、そして温もりを再確認できました。部活を退部した今では、時間や心、勉強にも余裕ができたため、家でのお手伝いもできることが増え、今まで以上に弟に優しく接することができるようになりました。

このように「家族」という存在は私の中でとても大切なものであり、無ければならないものでもあります。その中でも弟とは少し特別な関係だと思います。家族の中では一番歳が近いこともあって学校であったことやゲームの話など何でも話せます。だからこそ、言い合いも喧嘩も殴り合いだって誰よりもしてきました。だけど、最後にはお互いに謝って次の瞬間には笑い合っています。弟は私のたった一人の大切な姉弟で、親友みたいな存在なんだと思います。誰よりも近くって誰よりも正直に話せる、そんな弟だからこそ感謝や敬意を忘れずにこれからも仲良く、支え合って生きていきたいと思います。



優良作文

◆小学生の部◆

わたしのおじいちゃん

第四福田小学校　一年
井原（いはら）　奈菜（なな）

わたしのおじいちゃんは、いえのなかでだれよりもはやくおきています。そして、だれよりもはやくおしごとにいきます。そんなおじいちゃんは、ゴミのひにはゴミをすてにいき、わたしやおにいちゃんのならいごとにおむかえにきてくれ、わたしたちきょうだいがでかけるときには、かならずおこづかいをくれます。わたしがあかちゃんのころからいっしょにすんでいるおじいちゃん、いつもなにももんくをいうことなくニコニコしているおじいちゃん。つかれていても、わたしたちにいつもこえをかけてくれ、じょうだんをいってわらわせてくれるおじいちゃん。そんなおじいちゃんをみているわたしは、おじいちゃんのことがだいすきです。おじいちゃんもいつもわたしに、だいすきといってくれます。ねるまえにはおじいちゃんのところへいき、ギューっとしてからねます。これがわたしのおやすみのあいずです。おじいちゃんがさきにねていてもかならずします。おじいちゃんもよろこんでくれるし、わたしもうれしいです。いつも、わたしたちのためにだれよりもがんばってくれている、わたしのじまんのおじいちゃん。そんなおじいちゃんがいるからわたしもがんばれます。おじいちゃんがいつまでもげんきでいてくれるように、わたしはこれからもおやすみまえのギューをしたいです。わたしも、おじいちゃんのようにもんくもいわずにがんばれるそんなふうになりたいです。おじいちゃんいつもありがとう。



だいすきなおにいちゃん

赤崎小学校　一年

浅野（あさの）　かなみ

わたしにはおにいちゃんがいます。十一さいとしうえで、こうこう三ねんせいです。わたしよりもずっとせもたかいです。

わたしはおにいちゃんと、おいかけっこをするのがたのしいです。ときどき、ほうかごのがくどうほいくにおむかえにきてくれると、とてもうれしいです。おにいちゃんはやさしくて、いつもわたしのことを「だいすき」といってくれます。わたしがピアノのコンクールのひにきんちょうしていたときには、はげましてくれて、がんばることができました。

しょうがくせいになってはじめてのなつやすみは、おにいちゃんが、ボランティアで、がくどうほいくのせんせいとしてきてくれることになりました。わたしは、おにいちゃんといっしょにがくどうほいくにいって、そのままおにいちゃんがせんせいになってくれることを、とてもたのしみにしていました。

がくどうほいくがはじまると、おにいちゃんは、みんなとあそんでくれたり、みんなのしゅくだいをみてくれたりします。しばらくすると、みんなが、おにいちゃんに、「せんせい、せんせい」とあつまっていきました。それをみて、わたしはすこしさみしくなりました。なんだか、わたしだけのおにいちゃんでなくなったきもちになりました。でも、ともだちが

「かなみちゃんのおにいちゃん、かっこいいね。」

といってくれ、とてもうれしくなりました。せんせいとしてがんばるおにいちゃんをみて、わたしもかっこよくてたのもしいなとおもいました。ますますおにいちゃんのことがだいすきになりました。

おにいちゃんは、おおきくなったら、がっこうのせんせいになりたいそうです。いつもわたしのことをおうえんしてくれるおにいちゃんのことを、わたしもおうえんしたいです。



かぞくのためのまほう

倉敷東小学校　二年
朱（じゅ）　輪花（ゆんふぁ）

おかあさん、まほうをつかっているのかな。いつも、わたしが、あさおきると、ごはんがあって、せんたくものも、もうほしてあってまほうみたいです。小さいときから、おかあさんのごはんのあじつけがすきで、すこしうすあじだけど、おいしくてまほうみたいです。

わたしの家には、大人はおかあさんだけで、きょうだいは、姉が二人、兄が二人、弟が一人、妹が一人います。だから、家のしごとがおおくて、いつも、おかあさんは、せんたく、しょっきあらいなどでいそがしいです。てつだいたいけど、なにをすればよいのかよく分かりません。だから、できるだけ、自分の頭で考えるようにしたり、学校に行ったら、がんばるようにしています。そう思っていると、おかあさんが、えがおですごくよろこんでくれたことがありました。こまっている人のために自分で考えてこうどうできて、しかもしぜんにできたことがすごいとよろこんでくれました。そのとき、おかあさんのえがおをみて、思いました。わたしもまほうがつかえるのかも。

かぞくみんなが、えがおになるまほうっていったいどんなまほうなんだろう。きょうだいがけんかしたり、だれかがないていたりするときや、おかあさんがつかれてるときに、まほうのことばをかけよう。きょうだいがなかなおりしたり、みんながわらったりするまほうや、おかあさんが元気になれるまほうをかけたいです。でも、もしかすると、そっとしてあげたり、みまもってあげたりすることも、まほうになるのかもしれません。

やさしい気もち、思いやる気もち、きょうかんする気もちをたくさんもつことで、じょうずにまほうをつかえるようになりたいです。わたしは、かぞくのえがおをみると、心がうれしくなります。なぜかというと、さいこうのまほうがかかった気分になるからです。



たからもののキズ

第一福田小学校　二年
白神（しらが）　実華（みはな）

「ねぇねぇ、このおなかのキズってなあに。」
と、わたしはおかあさんとおふろに入っているときに気になって聞いてみました。
「これはね、みいちゃんたちが生まれた、たからもののキズなんだよ。」
と、おかあさんが言いました。
わたしは、四人きょうだいで、おにいちゃんと、下にふたごのおとうとがいます。おかあさんのおなかのキズは、わたしが生まれるときに、おいしゃさんがおなかを切ってとり出すためにできたキズだそうです。わたしは、
「なんで、おなかを切るの？」
と、おかあさんに聞いてみると
「みいちゃんはね、じんつうと言って、生まれてくるサインがはじまったのに、何時間も、なかなか生まれてこなくて、みいちゃんが、おなかの中できけんなじょうたいになってしまったから、いそいで、きんきゅうていおうせっかいをすることになったんだよ。」
と、教えてくれました。
ていおうせっかいとは、赤ちゃんや、おかあさんの体に何かもんだいがおきたときに、いそいで赤ちゃんをとり出す手じゅつだそうです。そのことを聞いて、こわそうだなと思いました。わたしはおかあさんに、
「おなか、きっていたかった？」
と聞くと、おかあさんは
「めっちゃいたかったよ！おき上がるのもあるくのも、たいへんだったんだよ。でもね、ふしぎと赤ちゃんのみいちゃんのかおを見たら、かわいくて、いたみがまほうにかかったみたいにきえるんよ。」
と、言い、わたしは、おかあさんってすごいなと思いました。ふたごのおとうともていおうせっかいなのでキズは目立つけど、おかあさんにとっては、たからもののキズと聞いてうれしかったです。おかあさん、がんばってうんでくれてありがとう。



じいじの木

長尾小学校　三年
小野（おの）　凌太朗（りょうたろう）

三年前の春、ぼくの大好きなじいじが天国へ、行ってしまいました。六人の家族が五人になってしまいとっても悲しい気持ちになりました。じいじは、しゃしんをとる事や、にわいじりをすることが大好きな人でした。

じいじがなくなる一か月前の事でした。ぼくの家のにわに以前から植えていた木に元気がなくなっていたことを心配していたじいじは、新しい元気な木に植えかえようと考えて家族みんなで、大きな植木やさんに行くことになりました。植木やさんには、たくさんの木が植えてありました。じいじは、「ロドレイアヘンリー」と言う名前の木をとても気にいりました。木の高さは、ぼくのすんでいる家の二かいのベランダくらいまであって、春には、赤い花がたくさんさいていました。じいじは、その木を買うことに決めました。三日後には、その木を植木やさんがぼくの家にはこんできてくれることになりました。

「いい木がみつかってよかったね。」とみんなで話しながらアイスを食べて帰りました。

三日後は、ぼくの小学校の入学式の日でした。入学式が終わって家に帰ってくると、植木やさんが大きなトラックで「ロドレイアヘンリー」という名ふだがついた木をはこんで来ました。古い木をぬいて新しい木を植える様子をみんなで見まもりました。しゃしんをとるのが大好きなじいじはずっとうれしそうにしゃしんをとっていました。

その三日後、じいじは、にゅういんしました。それから一か月くらいして、じいじは天国へ行ってしまいました。ぼくのはじめての遠足の前日のあたたかい日のことでした。

じいじがいなくなってしまいぼくもほかの家族もみんなさみしい気持ちになりました。でも、にわのまん中にある「じいじの木」を見るとじいじといっしょにいるような気持ちになれるのでさみしくなくなります。

「じいじの木」は、いつもぼくたちのことを見まもってくれています。毎日の登下校も、春に妹が小学校へ入学した時も、夏の朝にセミとりをした時も、秋に羽がまでごはんをたいて食べた時も、冬におもちつきをした時も、ぼくたちとじいじは、いつもいっしょです。これからも、「じいじの木」を大切にしながら家族みんなで、なかよく楽しくすごしていきたいです。





お兄ちゃんがいてくれるから

船穂小学校　三年

林（はやし）　千紗子（ちさこ）

お兄ちゃんは、いつもふざけたり、おこったり、いやな事を言ってくることがある。でも、やさしい時もある。一緒にラグビーの練習をする時は、どうやったら上手にパスができるか、どうやったら低いタックルができるか、細かく本気で教えてくれる。学校の勉強が分からない時も、分かるまで教えてくれる。お兄ちゃんがいてくれるから、私はいろんな場面で助けられている。

だけど私は、お兄ちゃんに勝てる所がないような気持ちになり、すなおにありがとうが言えない時がある。私のお兄ちゃんは六年生だけど身長一七〇センチあり、くつも二九センチで、お父さんとまちがえるほど大きい。私は、お兄ちゃんが三才も年上だけど、まけたくなくて、色々なことをがんばれている所もある。二月から始めたヴァイオリンは、お兄ちゃんの事をいしきせずに自分のペースでがんばっていたのに、お兄ちゃんは、ギターを持って来て、私がひいている曲と同じ曲をひきだした。お兄ちゃんは、またライバルになった。私が、がんばると、お兄ちゃんもがんばる。お兄ちゃんががんばると、私もがんばる。そうやっていつもすごしている。

お兄ちゃんは、おもしろい事も大好きで、人を笑わせる事がとくいだ。私もおもしろい事をいつもさがして、言ってみるけど、「まだまだじゃなぁ（ドヤァ）。」ときびしい一言をなげてくる。

だけど、私はお兄ちゃんが大好きだ。お父さんとお母さんが仕事でいなくて、二人でるすばんする時がある。その時は一緒に、ゲームをしたり、ギャグを考えたりして、さみしくない。私はお兄ちゃんがいなかったらどんな人になっていただろう。

時々私のことをほめてくれる。ラグビーのしあいでいいプレイをした時や、テストで百点をとれた時にほめてくれる。本当に時々しかほめてくれないけど、とてもやさしい顔をして、私の事を見てくれているお兄ちゃん。来年は中学生になるから小学校で会えないけど、今みたいに一緒に遊んだり、分からない事があったら、教えてもらいたいな。

努力家で何でもできる、かっこいいお兄ちゃん。おもしろくて、げい人のようなお兄ちゃん。大きくてやさしいお兄ちゃん。これからも、最高のライバルでいてね。お兄ちゃんがいてくれるから私はこれから先も色々な事をがんばれる。世界一しあわせな妹だよ。



ばあちゃん

粒江小学校　四年
松本（まつもと）　日向（ひなた）

わたしには、八月で九十五さいになるひいおばあちゃんがいる。いつもは、ばあちゃんとよんでいる。となりに住んでいて、よく話をする。

ばあちゃんは、同じことを何度も言う。一分前の話のこともわすれている。耳もあまり聞こえていない。着がえようとしてぬいだ服をまた着てしまう。朝なのか、夜なのかも分からなくなる。昔住んでいた家に歩いて帰ろうとするが、もう家はない。わたしのお母さんの名前も分からない。毎日、家族みんながとても心配している。

でもばあちゃんはすごい。昔は、あみ物の先生だった。目があまり見えていないのに、今でもあみ物がとく意だ。時間があれば手を動かして、わたしの服やぼうしをたくさん作ってくれる。

いつもごはんをのこさずきれいに食べる。自分の足でしっかり歩ける。そして、ばあちゃんはいつもえがおだ。

ある時、ばあちゃんに昔の話を聞いた。昔のことはよく覚えている。

ばあちゃんのお母さんは三十代でなくなったらしい。だから子どものころから、働いたり、家の手伝いをしたりして大変だったそうだ。ばあちゃんと話をすると、

「今が一番幸せじゃ。」

「こんなに幸せでええんかな。」

と、よく言っている。

わたしは、昔の話を聞くまで意味が分からなかった。大げさだなあと思っていた。家族はいて当たり前だと思っていた。でもいつどうなるかは、だれにも分からない。

正直、ばあちゃんとも、あと何年いっしょにすごせるかも分からない。

ばあちゃんはいろいろわすれていく中で、なぜかわたしの名前だけは覚えている。わたしと妹が遊んでいるのを楽しそうに見ている。

わたしは、そのばあちゃんを見るのがうれしい。だからこれからもばあちゃんとたくさん話をしたり、お出かけしたりしたいと思っている。すぐにわすれてしまうかもしれない。そのうち、わたしのことがだれなのか分からなくなるかもしれない。

それでも、ばあちゃんが大好きだし、少しでも長生きしてほしいから、楽しい思い出を作っていきたいと思う。



わたしのおじいちゃんおばあちゃん

川辺小学校　四年
吉田（よしだ）　愛梨（あいり）

わたしのおじいちゃんとおばあちゃんは、庭でお花や野菜を育てています。夏には、トマト・キュウリ・ナス・オクラ・ゴーヤ・しそ・ピーマン・トウモロコシ・スイカができます。いっぱいできた野菜は、近所の人にも分けてあげます。すると近所の人に、

「おじいちゃんとおばあちゃんが作った野菜はとってもおいしいね。」

と言われたので、おじいちゃんとおばあちゃんにその事を伝えると、おばあちゃんが、

「おばあちゃんがおいしくなるように、ひ料をあげたりして、手間をかけて育てているからだよ。」

と言いました。それを聞いた負けずぎらいのおじいちゃんが、

「おじいちゃんが畑をたがやして、いろいろな野菜を植えれるようにしているから、野菜を作ることができるんだよ。」

と言いました。それを聞いたおばあちゃんが、

「たがやしただけでは野菜はおいしくならないよ。」

と笑いながら言いました。それを聞いておじいちゃんもわたしも、笑ってしまいました。

おばあちゃんは、家で作った野菜でおいしい料理を作ってくれます。ゴーヤチャンプル・きゅうりのつけ物・トマトやピーマンをのせたピザ・ナスのみそいため・オクラとかつおぶしのあえもの・しそジュースなどです。おじいちゃんは、おばあちゃんが作ったおいしい料理が大好きなので、ほとんど外食をせず家で食べています。わたしもおばあちゃんの作る料理が大好きです。おいしい料理を作れるおばあちゃんは、わたしにとって自まんのおばあちゃんです。

おじいちゃんは、庭でお花や野菜を作りながら、ボランティアでグリーンパークのお花の植えかえや草とり・水やりなどの花だんの手入れをしています。夏は日の出が早いので、朝早く起きて暑くなる前にグリーンパークに出かけます。帰ってきた時にはあせびっしょりになっていることもあります。広い花だんの手入れは、とても大変そうです。わたしは、

「どうしてボランティアをしているの。」

とおじいちゃんに聞くと、

「お花が好きで、ボランティアが好きだからだよ。」

と言いました。ひさいしたこの町の公園に、今ではとてもきれいなお花がさいています。そのお手伝いをしているおじいちゃんは、わたしにとってじまんのおじいちゃんです。



次はオレがみんなのために

帯江小学校　五年
小山（こやま）　一陽（いちよう）

三月にオレは今までやってみたいと思っていたことに挑戦することに決めた。それは四才から習っているフラダンスで、大会に出ることだ。先生から「七月に神戸である大会に出てみない？」って電話をもらった時は、うれしくてピョンピョンはねて大声で

「やったー！」

とさけんだ。だけど先生からは

「よく家族で話し合って出るか決めてね。」

と言われた。大会に出るためにはたくさんの時間とお金がかかるらしい。オレは家族のみんなに大会に出たい気持ちを伝えた。だれもだめとは言わなかったし、「がんばれー！」と応えんしてくれた。オレは練習と大会が楽しみでしかたなかった。

大会の練習が進んでいくと休みの日はなくなるし遊ぶ時間もなくなった。それにお姉ちゃんはハンドボール部に入っていて、いつもはお母さんがいろんな体育館まで送り迎えをしているけど、オレの練習について来ないといけなくなっちゃったから、お姉ちゃんの送り迎えが出きなくなって「どうしよう。」と、家族会議があった。その時お姉ちゃんはすぐに

「大丈夫!!ぜったい一陽の方に行ってあげて！」

「私は自分で行く！」

「一陽がんばれよ！」

って言ってくれた。オレはお姉ちゃんのことが心配になった。大会の練習も難しくてなんかこわくなって泣きそうになったけど、今泣いちゃいけないと思った。だから、お姉ちゃんに

「ありがとう!!」

と言ったし、やる気と元気がわいた。夜遅く帰った日、お父さんが仕事から先に帰っていて

「おかえりー。」

ってにこにこ笑って迎えてくれた。がんばってよかったってうれしくなったけど、ビックリしたのはオレの大好きなラーメンを、用意して待っていてくれたことだった。ラーメン屋さんみたいに、元気に、目の前に運ばれてきてうれしかったし、本当にラーメン屋さんみたいだった。

七月になったら練習ももっと大変になって、体もくたくたになった。でもたくさんの人が応えんしてくれていたし、家に帰ったらみんなもつかれているのに、「おつかれ様!!」って、言ってくれたから、どんなにしんどくても、がんばれた。

大会の日、めちゃくちゃきん張したし失敗もしたけど、オレはなんと優勝した。家で待っているお父さんとお姉ちゃんに報告の電話をして声を聞いたら、よけいにうれしくて涙が出た。みんなに何回も何回も「ありがとう。」と言った。そしてオレはこれから家族のだれかが何かをする時は、自分もその人のために、一生けん命がんばると決めた。



忘れたくない思い出

琴浦西小学校　五年
黒川（くろかわ）　多恵（たえ）

ある日、お母さんが私と弟を呼んで
「大切なお話だよ。」
と言った。その時私は、すごくドキドキしていた。弟もびっくりして固まっていた。
お母さんから話を聞いた後、私はなぜか泣いていた。お母さんの話は、おなかに赤ちゃんがいるという話だった。多分私が泣いていたのは、赤ちゃんができるというううれしさと、びっくりした気持ち、不安な気持ち、いろいろ気持ちが、まざってできた涙だと思う。
私は、赤ちゃんができるのがすごくうれしかった。私は、毎日おなかの赤ちゃんに話しかけていた。ねられない夜は、いつも赤ちゃんのことを考えていた。「男の子かな、女の子かな、何をして遊ぼう、名前は何にしよう。」いろいろなことを考えていた。
赤ちゃんは女の子だった。それはさらにうれしいことだった。みんなで名前を決めることになった。いろいろな名前が出てすごくなやんだ。みんなの意見が合ったのは、『穂乃果』これで『ほのか』と読む。私は穂乃果の穂が好きだ。なぜなら私の名前、多恵の『恵』が入っているからだ。
そして、待ちに待った穂乃果のたん生日がやってきた。じんつうというものがやってきて、病院までの車の中でお母さんがさけんでいた。私はそれが一番こわかった。今まで感じたことのないピーンとはりつめた空気。だけど、とつぜん弟がキャキャキャと笑った。そうしたら、家族みんなが笑った。お母さんが、
「ありがとう、なごんだわ。多恵、大丈夫だからね。お母さんがんばるよ。」
と言った。その時こわさが消えた。晴太郎、あの時はありがとう。
病院に着いた。お母さんはすごく苦しそうに見えた。病院の先生が、
「頭が見えてきたよ。」
と言った。お母さんも穂乃果もがんばっているんだと思うとすごく応えんしたくなった。
そして、穂乃果が生まれた。お母さんは泣いていた。たぶん穂乃果が生まれたうれしさで泣いたんだと思う。お母さんありがとう。妹をおなかの中で大切に育ててくれて、妹を一生けん命、産んでくれて。私もこうやって生まれてきたんだね。また涙が出た。
そして今、穂乃果が生まれて二年たった。私は、穂乃果のことが世界一大好きだ。これからもずーっと一緒にいようね。



姉の入院で感じた家族の大切さ

老松小学校　六年
大野（おおの）　源太（げんた）

ぼくには、一つ上の姉がいます。姉は、小学校六年生の卒業式前に、一ヶ月入院しました。その日、ぼくは、小学校に行くために、六時半に起きる予定でした。でも、六時半に母に、

「これから救急車を呼ぶから、起きてくれる。ここには、ばあちゃんが来てくれるから。」

と、言われて、びっくりしました。何が何だか分からないまま、祖母が来て、それからすぐに、姉は救急車で運ばれていきました。ぼくは、夜には姉も帰ってくると思っていました。でも夕方、学校から帰って来ると、仕事に行っていた父がいて、姉が少し入院すると聞かされました。ぼくは、その一日、「まじか！」の連発でした。

それから、母は、ほぼ毎日病院に付きそいに行き、父は仕事があるので、昼の間は、一番上の中学校を卒業したばかりの姉や、祖母と過ごすことになりました。姉が入院してすぐ、春休みになったので、家のことはぼくたちや祖母で協力してやりました。母は、夕方には一度帰ってきて、夕食を用意しておふろに入るとすぐに病院にもどるので、食器の後かたづけなど、ぼくたちで出来ることをやりました。

最初は、二週間ぐらいでたい院すると聞いていたけど、さらに二週間のびると聞いた時は、本当にたい院できるのか、いつ家族みんながそろうのか不安になりました。病院では、コロナ禍で、しかも姉が入院している病棟は小児病棟と言うこともあり、小学生のぼくは病棟に入ることすら出来ませんでした。父と母ですら、二人一緒には入れなかったらしくエレベーターホールで交代していたそうです。

ぼくは、入院前まで、当たり前のように、話やけんかをしていた姉と、全く話も出来ず、顔をみることも出来ない日が続いていくことがとてもさみしかったです。

姉は、入院している時、最初の二週間くらいは、一人で歩いたり、ご飯を食べたりすることが出来なかったらしく、そんな姿をぼくたち姉弟に見られたくないと言って、病院での様子を直接教えてはもらえませんでした。

もし、ぼくが姉の立場なら、やっぱり見られたくないなと思いました。会う時は、元気ないつもの姿になってからがいいなと思ったので、姉も同じだったのかなと思いました。

一ヶ月の入院生活が終わり、一ヶ月ぶりに姉が帰ってくる時、病院にむかえに行く車の中で、ものすごく久しぶりな気がしました。

今回の姉の入院で、当たり前だと思っていた毎日が、当たり前ではないということに気づかされました。そして、家族のだれかが困っている時は、みんなの助け合いが必要だと思いました。ぼくと姉は、今もけんかをしたりふざけあったりしています。こんな当たり前の毎日が続いてほしいなあと思います。



ぼくは元気

玉島小学校　六年
濵（はま）　湊都（みなと）

ぼくは、お父さん、お母さん、自分、弟、妹と住んでいて、あとネコ一匹、犬一匹と一緒に暮らしていて、お父さん、お母さんは働いてます。毎日忙しくしているお母さんがいつも「一人一役、何かお家でできる事をしよう」と、よくぼく達に言っていて、自分は、階段のそうじと机ふきを主にしています。弟はくつがしまえないのでくつそろえ、くつじまい、ゴミすて、妹は保育園の時から、トイレットペーパーを付けかえる事とベッドのおふとんシーツをキレイにする事が役割です。

ある時、ぼくは嫌な事があって、落ちこんでいる時、お母さんが、

「どうしたん?元気ないがぁー。何か嫌な事でもあったん?」

と聞いてきました。説明して、ぼくは少し引きずってしまい、元気がない日を過ごしていました。

それからしばらくして、

「ただいまー。」

と大きな声で帰ると、お母さんが、

「どうしたん!?」

「めっちゃ元気じゃがー。」

と喜んでくれました。

「湊都はやっぱり元気じゃないとね。」

とお母さんが言うので、

「どういうこと?」

と言うと、

「家で一番声も大きいし、うちの元気担当じゃろー。」

とお母さんが言うので、その日から自分の役割は一つ増えて元気担当になりました。そこから元気な事ってとっても良いことなんだなぁって思うようになりました。ご飯を食べる時には「いただきます。」出かけるときには「行ってきます。」と言う声もちょっと意識するようになりました。そうすると、なんだか元気が出てくるようにも思えたし、みんなが笑顔になるような気もしました。最初は照れくさくて、お母さんに、

「何なん?その役割。ばかにしとん?」

と言ってしまったけど、元気でいる事って大切なんだなぁと思いました。

ぼくは、六年生の七月に山の学習に行きました。そこで暗夜行路をしました。自分は、先頭で正直不安だったのですが、こういう時こそ声を出してみんなを盛り上げようとたくさん声を出して元気に頑張りました。終わった後、先生達にほめてもらって自分は帰った時、その話を一番に家族にしました。担任の先生もめちゃくちゃほめてくれました。本当に嬉しかったです。

ぼくは、お家でのぼくの仕事が今ではお気に入りです。お家での仕事が外に出ても役に立つ事も分かったし、元気でいる事って自分だけではなく周りの人も元気にする事ができるんだなぁとも思いました。この経験を大切にして、これからもお家の中でのぼくの仕事をもっと探してみようと思ったし、ぼくにもできる事はもっとあるのかなぁとも思いました。

いろんな事があって、ぼくも元気が出ない日があるかもしれないけど、元気でいられるように楽しく過ごせるように少しずつ自分も成長していきたいです。そして、ぼくだけではなく、世界の人たちが元気で過ごせたらと思います。



◆中学生の部◆

笑顔になる料理

船穂中学校　一年
井上（いのうえ）　結衣（ゆい）

「みんなあ、夕ご飯できたよ。」

仕事から帰ってきた母と父、遊びから帰ってきた姉、妹をご飯ができたので呼んだ。私の母と父は共働きで忙しいので、夕ご飯は小六の時からずっと私が作っている。むね肉やもも肉を使ったチキン南蛮や、ささみを使ったからあげなど食材から料理を考えてつくるのは、とてもわくわくして楽しい。母や父が大変で、少しでも力になりたいと思ったから私は夕ご飯を作っている。実際、母と父は料理をする時間が省けて助かると言ってくれているのでうれしい。自分も夕ご飯を作るのは、とても楽しいので頑張れる。私が料理をしたいと思ったのは、祖母のおかげだ。祖母は料理を作る時まるで料理と会話をしているかのように、一つ一つの工程をていねいに行っていて、余計なことは考えずに料理のことを考えている。そんな風に私には見えた。祖母の姿を見ていた私は、祖母が憧れの存在になった。

私は、祖母の作るおいしい料理を作りたいと思った。そのためには、料理の味をもっとおいしくしないといけないと考え、いっぱい練習をしておいしく作れるようになろうと考えた。それで私は、祖母にレシピを聞いたりレシピ本を見て料理を作ることにした。私は作ったことのなかった、春巻きや鮭のムニエルなども作ったりした。ところが、祖母のある言葉で私の考えは変わった。

祖母が、料理を作りながらふと、

「笑顔になる料理ってなんだろう。」

と言った。その時、私の中に何かがよぎった。私の中にも、祖母と同じ疑問が生まれた。笑顔になるような料理って何だろうな。

また、私は普段から料理などを作っているけれど、その料理は食べている人は本当に笑顔になれるのだろうか。そもそも「笑顔になる料理」なんて考えたこともなかった。祖母の言葉は、私が料理をする上で、何が大切かを深く考えるきっかけとなった。私は、料理を作る時は、まず、おいしい物を作りたい。そう考えるようになった。そして、私は、春巻きを作った。春巻きは大変難しく、おいしいかどうか正直、分からなかった。

でも、家族たちは、私が作った春巻きを、

「おいしい。」

と言ってくれた。私が作った自信のなかった料理を

「おいしい。」

と言って笑顔になってくれる。その笑顔で、私は作って良かったという気持ちになる。まさに「笑顔になる料理」とはこういうことだ、と思った。

私は母に聞いた。

「笑顔になる料理ってどんなもの。」

母は、少し考えてから答えてくれた。

「ううん、難しいなあ、見た目もそうだけどでも一番は一生懸命、心を込めて作ったかどうかかな。」

と言った。私は、心を込めて作っているのか。料理を作る時だけに心を込めるのではなく、料理を食べる人のことを考える。料理を作る前から心を込めることが大切だと私は思った。

相手が体調を崩していたら食欲はないだろうし、毎日からあげでは、飽きてしまう。こんな風に、相手と自分をつなげて考える。その後も、母はいろいろと語ってくれた。料理をすることで何よりも大切なのは自分をコントロールするということだ、とか、自然から見た目や味を学んで料理に取り入れることなのだ、とか。私は、コントロールという言葉を聞いてはっきりした。自分をコントロールするということは、自分の体調を整えること。料理には、自分の気持ちが現れる。怒りながら作る料理よりも、ニコニコして作った方がおいしい。「笑顔になる料理」の答えは、祖母や母もまだはっきりとは分からないらしい。私は母の話を聞いて、私の中で「笑顔になる料理」とは、一回一回作る料理、料理に対して全力で向き合っていくこと。そして、どうやったら相手が喜ぶのか考えて、ていねいに作ることと、よりおいしい料理を作ること。こうすることで少しでも、「笑顔になる料理」に近づけるのではないかと私は考えた。私は、これから経験を積んでいこうと決めた。

私に「料理」という存在を与えてくれた祖母に感謝している。一緒に料理について話すことで、私の中で「憧れ」という位置にいた祖母に近づいたと思う。

私は、この先もたくさんの希望や宝物を祖母からもらうだろう。



雑炊のような家族

倉敷天城中学校　一年
田井（たい）　遥（はるか）

私の家族は父と母、私、二つ下の妹の四人家族だ。私は家族と過ごす時間の中で、嫌な時間がある。それは、一人一人違うことをしているときだ。父はゴルフ番組を見て、母は料理、妹はタブレットでゲームをし、私は勉強をしたりスマートフォンをいじったりしている。一人一人違うことをして、誰も一言もしゃべらない時間帯だ。このときは、一緒に居るのに気持ちはバラバラなようでさみしい気持ちになる。それに、私は家族に当たってしまうことがある。宿題がなかなか終わらず、苛立っているときに、父や母に「部屋を片付けて」や「早くお風呂に入って」などのことを言われると、ついきつい口調で返してしまう。そうなると、父も母も妹も私もみんな楽しくなくなってしまう。本当は心から反省している。

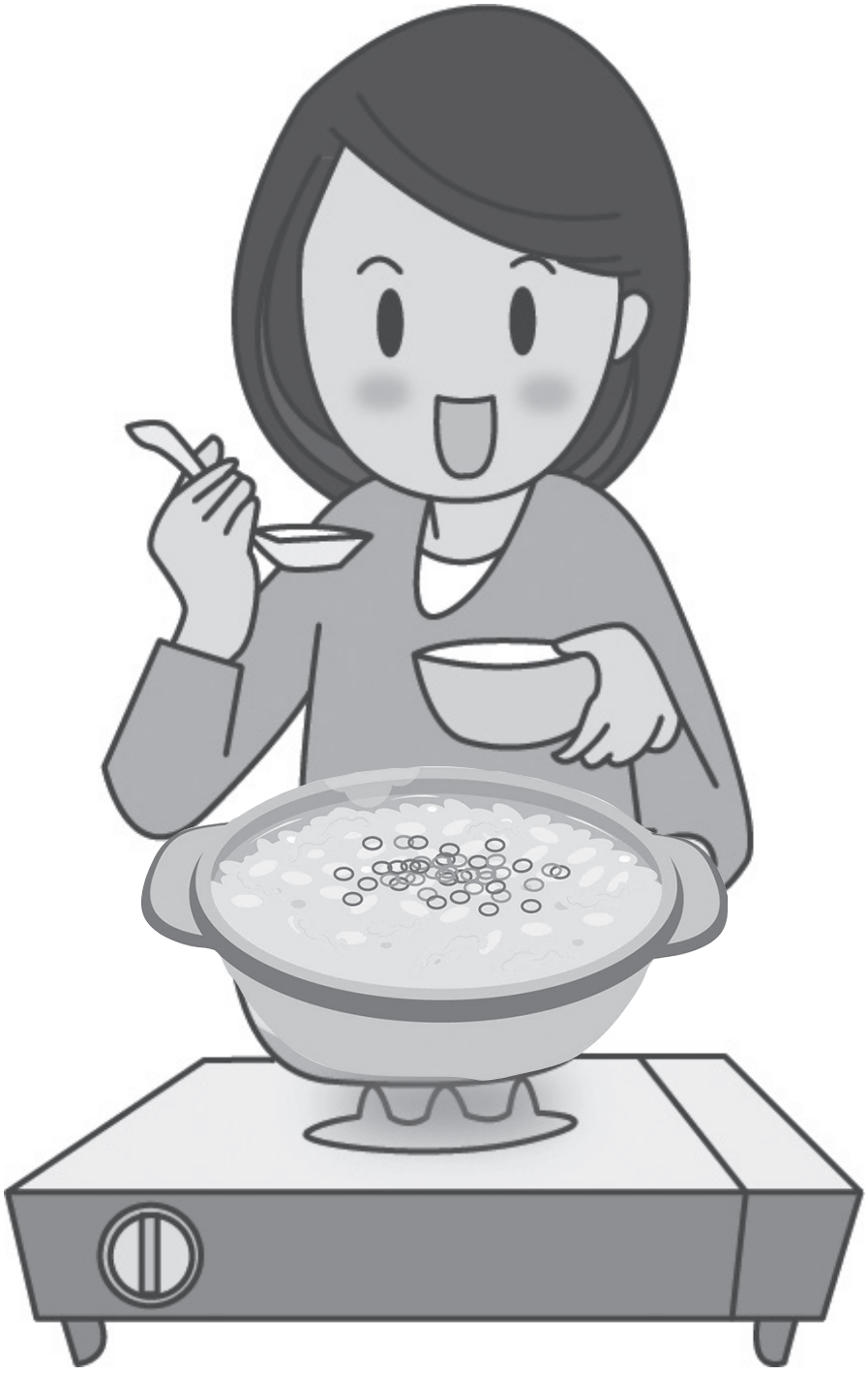
そんな我が家で事件が起きた。去年の夏、母が倒れ救急車で運ばれたのだ。父もあとから病院へ行った。私と妹はとても不安な気持ちで留守番をして、父の連絡を待った。母は大きな病気ではなかったので、家に帰れることになった。家に帰ってきても母はずっと二階の寝室で寝ていた。この日の晩ご飯は父がお弁当を買ってきてくれて、母以外で食べたが、何だかあまり美味しくなかった。母が寝こんでいる間、洗濯物は山盛りになるし、部屋もどんどん散らかっていった。いつも母は知らないうちに当たり前のように家事をして、部屋も片付けてくれていたんだなと気付いた。私は妹と相談して、洗濯物を一緒に畳んだ。いつもなら、「洗濯物畳んだよ。」と報告する母も近くにいない。母がいないとご飯も美味しくないし、元気が出なかった。数日たって母が動けるようになったので、私の大好きな雑炊を作ってもらった。私は母のつくる雑炊が前から大好きだったが、この時の雑炊が今までで一番美味しかった。久しぶりにみんなそろって話をしながらご飯を食べて私はこういう時間が温かくて好きだなと思った。

私は、家族が雑炊のようだと思う。なぜなら、雑炊は作る前の具材だけだと美味しくないし、出汁がなかったら美味しくないと思うからだ。美味しい出汁は、家族で一緒に過ごす時間だと思う、つまり、出汁は「幸せ」という気持ちだ。

私は、家族で公園でバドミントンや鬼ごっこをして遊ぶことがあり、私はそのときに特に幸せだと感じる。こんな温かい場所をつくってくれる母にはとても感謝している。私が大人になっても、ご飯を家族でそろって仲良く食べたり、みんなで遊ぶ時間をたくさん作りたいし、笑顔を忘れないように過ごしていきたいと思う。そして今、どうしてもバラバラの時間をゼロにすることはできないが、家族みんなでその日の出来事を話したりして、笑顔があふれるご飯の時間を大切にしていきたいと思う。

雑炊は、それぞれの具材が集まると、とても美味しくなる。普段はずっと一緒にいることはできないが、集まるととっても楽しいし幸せ。

私は、そんな家族が大好きだ。



後悔

東陽中学校　二年
堤（つつみ）　有煌（あとら）

二〇二二年九月八日午前四時四分。

私はこの時を決して忘れることはないだろう。祖父が息を引き取った時間だ。

私の両親は私が一歳の時に離婚している。それから母の実家で祖父母と母と兄の五人で暮らしていた。

十一年間ともに過ごした祖父は私にとって、いわば父親代わりであった。私が小さい頃から、祖父は本当にたくさん私の面倒をみてくれ、色々なところに連れて行ってくれていた。近場の散歩や、時には電車に乗って遠出し、年に一度は必ず旅行に連れて行ってくれた。

私は祖父と仲が良く本当におじいちゃん子であった半面、よくケンカもした。

中学生になっても今まで通り面倒を見てくれていた祖父を、なぜか疎ましく感じるようになっていった。祖父は変わらず朝起こしてくれて、学校や習い事の送迎をしてくれ、色々な事にアドバイスをくれたり、何よりもいつも私の事を気にかけてくれていたのに、私はきつく当たったり、そっけない返事をしたり、ありがとうさえ言わなくなったりしていった。

ある日、祖父は入院をした。すぐに退院し帰ってきたが、私が知っている祖父ではなかった。祖父は百八十センチ以上ある大柄で、いつもどっしりニコニコしている人だったが、退院した祖父は弱々しく、活気もなく動きもゆっくりだった。

それからは歩くことも話すことも食べることも減っていき、どんどん痩せていった。階段の上り下りが難しいせいか、朝はスマホにモーニングコールで起こしてくれるようになった。

そんなにしんどい中でも私の面倒を見てくれていたのに、反抗期に加え寝起きの悪い私は、態度悪く起きて祖父に嫌な思いをさせていた。けれども祖父は、そんな中でも必ず私に

「行ってらっしゃい。」

と声をかけてくれた。

その日の朝も私は態度が悪く、朝から祖父と言い合いをしていた。学校から帰るとすぐ塾に行った。いつも通り塾が終わり、母が迎えに来たがいつもは鳴らさないクラクションを鳴らしすぐ乗るように急がされた。

車に乗ると母は落ち着いて聞いて、と話し始めた。

「じいじが倒れて救急車で運ばれた・・・。」

その後は何を言ったかわからず覚えていないが、頭が真っ白になり涙が自然とこぼれていた。家に着くと母は病院に行った。私は兄と留守番をしていた。泣き疲れて寝ていたら兄に起こされた。兄は

「じいじがあまり長くないって。これから会いに行くから用意して。」

と伝えてきた。用意していると母が迎えに来て、病院に行くとそこにいた祖父はもう意識がなく、寝たきりになっていた。

感染症対策の為、病室には一人ひとり入ることになった。私が一番に入り、泣きながら今までの無礼な態度について謝った。祖父はもう話すことはできないが、聞こえていたのか頬に涙が流れていた。

朝、祖父は帰らぬ人となった。

私はなぜあの日、にこやかに行ってきますを返さなかったのだろうか。なぜ当たり前に思わず常にありがとうと口にしなかったのだろうか。祖父がいなくなってから本当に涙が枯れるほど泣き、落ち込み、後悔をした。

それからの私は家族が家を出るときは、「行ってらっしゃい」何かあるたびに「ありがとう」など挨拶をしている。当たり前のようで家族の間ではできていないこともできない時期もあるのではないかと思う。けれど、人はいつどんなタイミングで別れるかわからない。伝えなかった後悔はしたくないので、大好きな祖父が最後に私に教えてくれたことをこの先もずっと守っていきたいと思う。

祖父がいなくなって、家族の中でさらに祖父の存在は大きくなっていき、祖父の言っていたことが胸に響くようになった。

祖父が大切にしてきたこの家族は、ありがとうであふれていたことに気がついた。

「じいじ、ありがとう。」



ぼくの家族

倉敷天城中学校　二年
仁科（にしな）　貴悠（たかひさ）

ぼくの家族は、父、母、姉、妹の五人に猫二匹で暮らしている。

父は時に理解しがたいことをして、母に怒られたり、以前に注意されたことをして、また母に注意されている。そして、いつも「おまえらにも分からせるために、わしが怒られてやってるんじゃあ。」と笑っている。そして家族全員に少し変な呼び名をつけている。反面、医師である父は仕事をするときは別人である。

母はいつも忙しそうにしている。ぼくをみると色々手伝いを言いつける。「貴ちゃんは優しいからやってくれるよね。」なんて言って。ごみ捨て、お風呂掃除次々に要求してくる。ぼくはなぜか、上手く誘導される。そして、ひと言、「貴悠は宿題しないの。」手伝いさせてたの誰や。

姉は正直怖い。基本的には仲が良いとは思うが、姉と意見が合わないとボコボコにされる。これまで、ぼくの意見が通ったことはほぼない。いつも、言い負かされている。しかし、最近、こっそり優越感に浸っていることがある。それは、姉より少しだけ背が高くなったことだ。上から見下ろしている感じ。姉には、絶対言えない。

妹は、可愛いがうっとうしいこともある。勉強が好きではなく、あまり考えずにすぐに聞いてくる。「兄ちゃん教えてー。あめ一つあげるからよろしく。」と甘え上手である。そして、あめの誘惑に負けるぼく。しかし、妹はテニスだけはどんなことよりも頑張っている。毎日練習したあと、どんなに疲れていても素振りは欠かさない。その頑張りは本当に尊敬できる。

そして、二匹の猫ちゃん。いつもぼくに近寄ってきてくれて、ニャーンと体を擦り付ける。きっと、ぼくのことが大好きなんだ。いや、エサがほしいだけかも。とにかく、二匹には本当に癒されているのだ。

こんな五人と二匹は、帰宅時間は違うけれども、就寝までほぼリビングで共に過ごすのが仁科家である。学校から帰ったらそのままリビングへ行き、制服もバッグもリビング。毎日、自分の部屋に置きなさいと言われてもだれ一人動かさない。母にもう部屋なんていらないねと言われるが、確かにその通りなのかもしれない。

みんなが揃うと、まず、学校での出来ごとを報告しあうように話す。正直、知らなくても良いようなこともたくさんあるが、何か話題がないと落ち着かない。そのうち、勉強するもの、テレビを見るもの、仕事をするものそれぞれがやりたいことを始めるのだが、気が付くと、再び同じことをしていることが多い。だれかが、疑問を投げかけると自分で考えてと言いながらも結局教え合っていることが多い。

去年の六月、猫の一匹が病気になり入院した。リビングから家族が消えた。居ないことは分かっているのに、思わず名前を呼んでみる。リビング中を見渡すが姿はない。とても悲しい気持ちになった。きっと、家族みんな同じ気持ちだったと思う。しかし、退院まで

の三週間笑顔で乗り越えた。家族が一緒だったからだと思う。この経験から改めて家族の大切さを考えた。

我が家のリビングではいろいろなことがある。楽しい話題、悲しい話題、困った話題などさまざまな会話があり、笑ったり、怒ったり、泣いたりする。時には、家族で相撲を取ったり、ゴローンと横になったり、たわいもない日常生活だが、いつも笑顔を忘れない素敵な家族で素敵なリビングである。僕は本当に幸せだと思う。

ぼくはぼくの家族が大好きだ。この家族がいるだけで、安心できるし、毎日がとても楽しく感じる。ぼくも家族にとってそのような存在でありたい。

最近は部活や塾などで帰りが遅く一緒に過ごす時間も短くなってきている。正直、面倒くさいこともあるし、嫌なこともある。しかし、ぼくはこのリビングが大好きだ。とても居心地がいい。

二年半後には、姉が大学進学でいなくなるかもしれないけれど、これからも五人と二匹このリビングで楽しく過ごしていきたい。そして将来ぼくもこんな家族、リビングをもちたい。



愛を言葉に込めて

東中学校　三年
伊藤（いとう）　万央（まお）

私は将来、明るい家庭を築きたいと思う。暗くて元気のない家庭よりは、明るく楽しい家庭の方がいいと思うからだ。では、明るい家庭を作るにはどうしたらよいのだろうか。

突然だが、あなたは読書をするだろうか。私はよくする。特に物語を読むのが好きで、まるで物語の登場人物になったかのようなあの感覚が好きだった。物語には、たいてい「悪役」と「ヒーロー」がいる。悪役をヒーローがやっつけてハッピーエンド。私は物語をたくさん読んでいく中で、あることに気づいた。悪役の共通点だ。それは、悪役の幼い頃の環境があまり良くない点である。

ある物語の悪役は、愛を与えられず、独りぼっちという環境で過ごした。すると笑う、泣くという感情を感じる機会がなくなる。そして、感情を失ってしまい何も感じなくなり、罪を犯してしまうというものがあった。

他にも、小さな頃のトラウマから誰かを憎むようになる、というのがあり、小さい頃の出来事が関係している物が多くあったのだ。

もちろん、一概にはいえないし、私が読む物語が、たまたまそうだっただけかもしれない。けれど私は、少なからず関係していると思う。根っからの悪人なんていなくて、幼い頃の経験が己を縛り、罪を犯してしまうのだと感じた。

生まれたばかりの子供は、まっさらで真っ白で何にも染まっていない。そんな真っ白な子供に、どんな色を加えるかは、「親」が鍵になってくると思う。小さな頃の経験は、その子供を構成する大きな要素となるからだ。

ここで、本題に戻ろう。明るい家庭を作るにはどうしたら良いのか、という問題だ。明るい家庭に必要なものというと思いやり、優しさと、人により考え方は様々だ。けれど私は、明るい家庭に必要不可欠なのは「笑顔」だと思う。笑顔であふれる家庭は、暗さなんてかけらもなく、明るいイメージが私の中にあるからだ。笑顔といっても、ただ個々で笑っているだけでは意味がない。私は、明るい人の集まりではなく、明るい家庭を築きたい。家庭というまとまりで一つになりたいのだ。それならば、やはりコミュニケーションが必要だと思う。コミュニケーションは、人と人とを繋ぐ手段で、よく用いられる。コミュニケーションがあれば、楽しさや悲しさなどの感情を共有でき、家族という絆で結ばれるだろう。絆で結ばれれば、一緒にいるのが心地よくなり、自然と笑顔も生まれるように思う。

だから、私は将来、子供とコミュニケーションをとることを大切にしていきたい。けれど、コミュニケーションを義務的に行うのではなく、「愛」のあるコミュニケーションではないと意味がないのではないだろうか。愛とは相手を大切に想う気持ちだと、私は思う。そんな愛をこめて発する言葉と、何も愛をこめず発する言葉だと、大きく違ってくる。その場の雰囲気、相手の受け取り方、その全てが。不思議なことに、発する言葉は同じでも、込めた気持ちというのは自然と相手に伝わるものだ。愛を込めることでその愛が子供に伝わり、子供は愛をもらい嬉しくて笑顔になる。そしてその笑顔を見て私も笑顔になる。すると、子供も親も笑顔である、笑顔あふれる明

るい家庭ができるのである。

愛のあるコミュニケーションは、みんなが笑顔で明るい家庭をつくるために、なくてはならないものだ。だから、私は将来、「愛」のあるコミュニケーションで、明るい家庭を築きたい。



祖父と私の夏休み

味野中学校　三年
齋藤（さいとう）　真結子（まゆこ）

私は小さな頃から宿題を提出することができませんでした。小学一年生のときから未提出が常でした。やろうと思えばそれほど時間はかけずにできるだろう課題でも、やる気が起こらないのです。未提出を重ねた結果、担任の先生からも親からも大目玉を喰らいます。

勉強が嫌いなわけではありません。自分の好きな事ならば何時間でもできるのです。百人一首、英文や憲法の暗唱なら時間を忘れて没頭してしまいます。でも、〝やりなさい〟と言われた途端にやりたくなくなるのです。

自分がやりたいことだけ頑張って、やれと言われたことからはのらりくらりと逃げる。宿題に限らず、一事が万事そんな調子だった私のことを、母と祖母はもはや諦め

「まゆこはほんまに天邪鬼じゃわあ。」

と言っていました。

当時幼かった私は、天邪鬼がどういうものなのか分っていませんでした。「あまのじゃく」ってなんだろう……。そう思い調べてみると、

【天邪鬼】わざと他人と反対の言動をする人のこと。ひねくれた性格。つむじ曲がり。と出てきたのです。どう考えても褒め言葉ではありません。

嫌味を言われてふてくされていた私に、祖父がニコニコ笑いながら、

「でも、そう悪いことばっかりじゃないぞ。まゆこが、自分の考えたことを曲げずに貫ける子ってことじゃ。大きくなったら自分の意見をはっきり言える人になれる。でもな、ちょっとずつでも宿題を出せるようになろうな。そうしたら良い天邪鬼になれる。きっと今よりももっと楽しくなるぞ。」

私は大好きな祖父が褒め言葉に変換してくれた部分を都合良く受け入れ、後半の重要部分を棚に上げたまま中学生になってしまいました。

しかしながら、良くない天邪鬼として成長した私に、遂に社会の掟という鉄槌が下される時が来ました。「内申書」という評価基準です。

やりたい事だけをやりたいだけやる、という独自システムで生きてきた私にとって、高校入試に影響する調査書は鬼門と呼ぶべきものです。重要だと聞いてはいましたが、本当の意味では分かっていませんでした。このままではまずい。私は焦りました。

両親に相談してしまえば叱られる。と直感したので、祖父を頼ることにしました。今回は流石に小言を言われるかもなあ、と思っていましたが、祖父は、

「早く分かってよかったのお。大丈夫じゃろ、これからいくらでも挽回できるぞ。」

と、励ましてくれました。その後ふたりで考えて、夏休みに頑張ることを三つ決めました。

一．宿題は必ず提出すること
二．準備は前日にすること
三．アラームで時間を管理すること

十四歳にもなれば完璧に出来ているであろうたった三つの約束を守ることですら、私にとっては難しかったのです。何度も、

「約束なんて多少守れなくても生きていけるじゃん！」

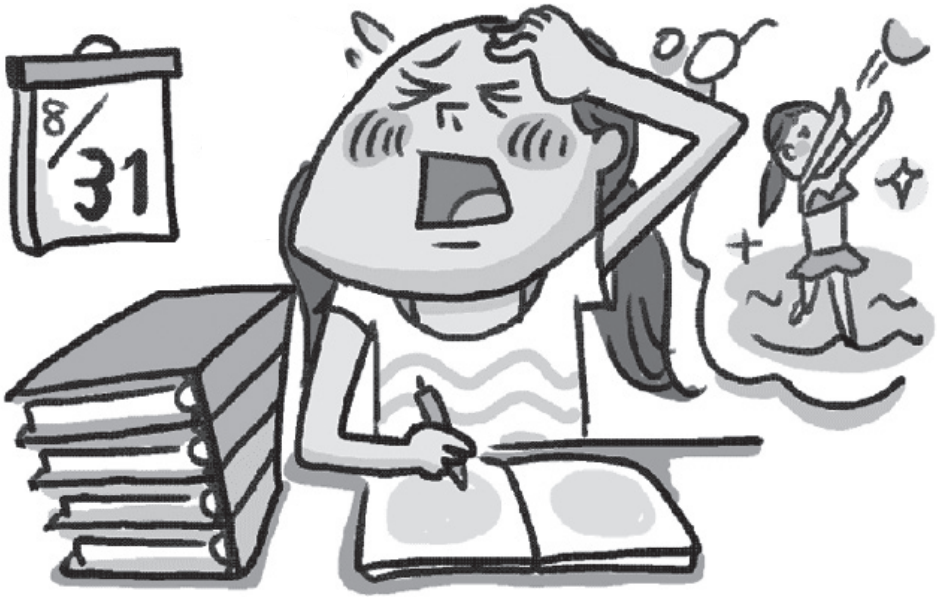
と叫んでいました。そんなときは祖父が笑いです。

ながら、

「頑張りよるなぁ、えらいえらい。」

と、何故か褒めてくれるのです。思考回路が単純な私は、じいじが褒めてくれたし頑張っとくかあ……。と謎のやる気で頑張ることができました。

いつも私のことを見守り、可愛がってくれる祖父に喜んでもらうためにも、自分ができる限り頑張らないとな。と思いました。そして今、夏休み最後の課題であるこの作文を書いています。この作文を書き終わったときには、一番に祖父に読んでもらうつもりです。いつもは恥ずかしくて、面と向かってお礼なんて言えないけれど、この作文で伝えられたらいいなと思います。



令和５年度「明るい家庭づくり」作文募集要項（倉敷市）

公益社団法人岡山県青少年育成県民会議(以降県民会議と記載)では,標記の作文を募集しています。この募集に際し，倉敷市では次の通り自作の未発表作品を募集します。

記

1　主題　「明るい家庭づくり」を主題としたもの。例えば,

- 小・中学生の場合：「がんばる家族のすがたを見て」「家庭の中での私の仕事」「家庭の中での話し合い」「大人になったらこんな家庭をつくりたい」「家族で○○に参加して」(○○は地域活動・行事)等
- 保護者の場合：「親と子のふれ合い・対話」「わが家の子育て方針」「家庭同士のふれ合いや助け合い」「家庭に関する社会問題について考えたこと」等
- 共通主題：「わが家の家庭の日」「よりよい家庭づくり」

2　対象

（１）倉敷市内の小・中学校に在籍する児童・生徒。(応募先が県民会議であるため，倉敷支援学校は除く)

（２）倉敷市内に在籍する園児・児童・生徒の保護者及び勤労青少年。

3　応募方法

（１）作文は**Ｂ４判またはＡ４判**４００字詰原稿用紙を使用（小学校低学年はA3判原稿用紙でも可）し，**制限枚数(右表の通り)を厳守する**。
（１行目に題名・２行目に学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入し，**３行目から本文**を書く。）

（表；制限枚数）

小学生（１～２年）	２枚以内
小学生（３～６年）	３枚以内
中学生・保護者・勤労青少年	５枚以内

（２）提出先は，倉敷市教育委員会生涯学習課「明るい家庭づくり」作文係。

（３）小学生・中学生が応募する場合は，在籍する学校が取りまとめて提出する。
各校で選考した各学年２点までの作品が応募できる。作品には，別紙１（「明るい家庭づくり」作文原稿用紙貼付用紙）を貼付する。また，別紙２（「明るい家庭づくり」作文　教育委員会送付作品一覧表）を添付して提出する。

（４）応募締め切りは，**令和５年９月１２日（火）(必着)**。
※保護者及び勤労青少年からの応募作品には，住所・電話番号・児童生徒が所属する学校園名・勤務先名等を記載した書類を添付して直接提出する。

4　倉敷市長表彰（小学生・中学生に限る）

応募作品について，各学年１０点の一次審査通過作品を選考し，その中から各学年２点の優良賞作品と各学年１点の優秀賞作品を市長表彰する。（１０月上旬頃に受賞決定の通知をする。）

優秀賞受賞者は，翌年２月頃に開催する表彰式に参加し，作文を発表する。受賞者には賞状及び記念品を贈り，作品は県民会議へ推薦する。

優良賞受賞者には賞状を，一次審査通過作品には学校を通じて記念品を贈る。

5　その他

（１）優秀賞作品以外の作品は，返却する。

（２）市長表彰作品の出版権は生涯学習課に属することとする。

（３）倉敷市長表彰作品（優秀賞・優良賞）と一次審査通過作品は，作文・学校名・学年・氏名等を掲載して作文集として発刊したり倉敷市教育委員会生涯学習課のホームページに掲載したり，県民会議や市での青少年健全育成運動資料等として活用されたりすることがある。

（４）この要項は，この募集に関し県民会議が定める要領のほか，倉敷市教育委員会生涯学習課が必要な事項を定める。

一次審査通過者一覧

◆小学生の部◆

【一年】

倉敷東小学校	清水　統真
葦高小学校	赤木　絢翔
菅生小学校	大村　由詩
西阿知小学校	石原　未琴
第四福田小学校	井原　奈菜
第四福田小学校	山本　悠葉
連島神亀小学校	犬飼　鈴
赤崎小学校	浅野　かなみ
長尾小学校	松尾　望央
船穂小学校	小野　那流

【二年】

倉敷東小学校	朱　輪花
倉敷南小学校	谷田　誠太朗
菅生小学校	吉國　志穂
茶屋町小学校	髙畠　瑛斗
第一福田小学校	白神　実華
味野小学校	岩﨑　敦紀
郷内小学校	山田　彩喜
船穂小学校	武政　陽依
川辺小学校	片島　望悠
呉妹小学校	木村　悠晴

【三年】

葦高小学校	吉岡　千夏
中庄小学校	岡﨑　葵
豊洲小学校	大下　亜恋
西阿知小学校	吉川　莉玖
連島南小学校	山岡　未來
玉島小学校	猪木　愛莉沙
柏島小学校	渡邉　杏
長尾小学校	小野　凌太朗
船穂小学校	林　千紗子
川辺小学校	中原　樟

【四年】

粒江小学校	松本　日向
菅生小学校	原口　晴也
茶屋町小学校	下窪　奏太
緑丘小学校	宇川　季壱
緑丘小学校	小銭　結人
郷内小学校	長嶝　葵友咲
玉島小学校	森分　幸
玉島小学校	安原　凜太朗
柏島小学校	林　陽菜
川辺小学校	吉田　愛梨

【五年】

万寿小学校	成末　健人
帯江小学校	小山　一陽
第三福田小学校	木津　桜
琴浦西小学校	黒川　多恵
玉島小学校	小野　彰大
乙島小学校	宮下　友梨奈
長尾小学校	土井　大誠
船穂小学校	福井　颯太
薗小学校	石井　希和
	笠岡　一花

【六年】

老松小学校	大野　源太
倉敷南小学校	宮原　歩明
第一福田小学校	宇津　愛来
琴浦南小学校	山本　紅羽
郷内小学校	水本　苺華
玉島小学校	濵　湊都
上成小学校	河端　煌士朗
柏島小学校	船橋　悠馬
長尾小学校	藤森　乃亜
川辺小学校	小原　叶夢

◆中学生の部◆

【一年】

南中学校	大久保　明日花
多津美中学校	浅野　歩香
連島南中学校	黒瀬　美玖
児島中学校	中塚　百々花
玉島西中学校	吉村　心琴
玉島北中学校	中原　花菜
船穂中学校	井上　結衣
船穂中学校	林　香予乃
倉敷天城中学校	有信　舞
倉敷天城中学校	田井　遥

【二年】

北中学校	小田　七輝
北中学校	柳田　莉夏
新田中学校	松田　梨々花
東陽中学校	堤　有煌
水島中学校	小野田　美咲
連島南中学校	亀谷　南
真備東中学校	河嶋　文菜
真備東中学校	宮本　菜月
真備中学校	外池　紗佳
倉敷天城中学校	仁科　貴悠

【三年】

東中学校	伊藤　万央
南中学校	金田　輝
南中学校	小村　彩百合
連島南中学校	古角　綾音
連島南中学校	小山　未来
味野中学校	齋藤　真結子
玉島北中学校	中川　心結
船穂中学校	赤澤　きらら
倉敷天城中学校	西山　茉絢
倉敷天城中学校	村上　奈々美



倉敷市青少年を育てる会

令和４～５年度活動スローガン

令和 5 年度

「明るい家庭づくり」作文集

令和 6 年 2 月発行

発行・編集

倉敷市教育委員会生涯学習課

〒710-8565

倉敷市西中新田 640 番地

電話・086-426-3845

倉敷市　「明るい家庭づくり」作文　検索

リサイクル適性Ⓐ

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。